

夢ではなくなつた九州一周

藏満 先輩(31)の奔走で実現

幹部部員の嘆き

昭和二十八、九年の自動車部は幹部部員が極端に少なかった。新入生は大人数いるのにそれを指導したり、整備やアルバイトの中心になつて活動する二、三年生が四、五人しかない。

四年生は卒論の準備で忙しくなるから、滅多に部室や車庫にも来ない。三年生の中島 30) 渡辺 30) の両先

輩、二年生は藏満 31)、河相 31) の両先輩が特別に熱心でその他の上級生はコンパや合宿などには参加したが、日常のアルバイトはたまにしか顔を出していなかった。

それでも、合宿整備やアルバイトで汗を流したあと、僅かな時間ハンドルを握らせて貰う新入生はこれら先輩たちの献身的な整備や運転の指導に感謝したものだつた。

ひょうたんから駒

そんななか、昭和二十九年の年の暮れも押し迫って、自動車部は冬の合宿の準備や、正月休みで帰省する寮生の荷物運びなど部活動が重なって帰りそびれて部屋で年を越す部員が何人かいた。除夜の鐘を聞きながら二年生部員のひとり「来年はどんな年になるのだろうか。何か思いきったことがしてみたいな。例えば九州一周とか。」「そりや無理だろう。ガソリンもないし。」「ひとり、いくらくらい掛かるかな」「彗星と、蒼竜あわせて何名乗れるかな」と勝手に勝手なことをしやべっていたが、だれもが夢物語としか思っていないかった。

年が変わった一月のはじめ、また部室で数人が寄って話をしているうち、「遊びに行くのは無理としても、テーマを絞って実験データを採るといふ目的があればどうにかならないだろうか。」と言いついで出す部員がいて、藏満先輩が部長先生に事情を説明し遠征実施の了解をとりつけ、また福岡トヨタや喜多村石油などに交渉した結果、とうとう九州一周遠征が実現してしまつた。テーマとしては「九州各地の主な国道や県道の舗装など道路状況」「道路とガソリン消費量の関係」「ガソリンスタンドの分布状況」「運転時間、速度、道路状況などと疲労度の関係」など数件の測定計画をつくり、二月の半ばにトヨタB M型トラック二台借り受けることが正式に決まつた。

問題は乗車定員である。参加希望者を募ると二十人近くになる。この人数を定員三名、二台でも定員六名のトラックへ乗せるには定員外乗車の許可がある。自衛隊小倉駐屯部隊に頼んでホロと支柱を借りて来た。座席は講堂のベンチを荷台に固定し、一台あたり七名の定員外乗車を戸畑警察署に許可申請することになったが、これがすんなりとは行かない。

一方、実験データを取るにはそれなりの器材が必要である。国

地名	出発時間	到着時間	備考
一宮(大)	13.00	13.00	23日(水)
博多	15.20	19.50	24日(木)
唐津	21.10		
長崎	7.30	10.30	25日(金)
壱岐	13.30	14.50	
島原	18.00	7.00	26日(土)
佐賀	13.20		
筑前	17.00		27日(日)
北九州	21.30	22.00	
三津	3.50		28日(月)
高松	8.00	16.40	
徳島	18.00	8.00	29日(火)
高松	10.50	19.00	
徳島	16.00	16.50	30日(水)
高松	18.00	7.00	
徳島	12.10	14.10	31日(木)
高松	15.20	17.20	
徳島	19.30	22.00	
高松	19.30	15.00	
徳島	21.45		
高松	22.25	12.00	
徳島	20.10		

注 帖佐=現始良町

道や県道の舗装または道路状況をチェックするには、振動測定器が是非必要ということ、振動学の権威、井上先生（この第七代学長）に相談したものの「この種の測定には三次元振動計が必要だが現在日本ではまだ皆無に近く、製作するにしても時間がかかる。」ということ、結局人間の眼と体感で測定することになった。

その他のデータ測定の方法は、荷台にガソリン消費量を測定するためのドラム缶を積み込み、銅パイプ（当時はまだビニールパイプはなかった。）を運転席を通ってフューエルポンプまで抜け一定時間、一定距離ごとに目盛り付きの棒を差し込んでの原始的測定。ガソリンスタンドや道路標識（速度制限など）は運転席の部員がノートに記入。疲労測定は交替する前とあとに、運転者に親指と人差し指で輪をつくらせ、測定者が三十センチ物差しのはしをつかんで予告なしに手放して、瞬間に握りしめた目盛りで疲労度を測った。この測定法は、いい加減のようだが疲労度の測定法としてはそれなりの数値が得られた。各担当班が決まり計器や測定器を手作りで作り始めたがなかなかかどらず出発予定の三月二十三日はあつという間に来てしまった。

定員外乗車の許可申請について戸畑警察署の黒江交通課長とのやりとりが続いたが当日になつても許可は下りず、暗黙の了解を得たと解釈し「遠征中事故か何かを起こしたときは急遽連絡して相談します」という口約束のみで二台のトラックと十八名の参加部員は戸畑をあとにした。

昭和三十一年三月二十三日午後三時を回っていた。前ページの予定表は嘉村部員（33）がガリ版で作成し、斎藤氏（33）が現在まで保存していたものである。

道交法違反と横転事故

定員外乗車の許可をもらえないまま、強行したつげはすぐに回ってきた。二日目の二十四日夕方、長崎市から島原半島へ



出発前 大学本館前

向けて諫早付近を通過中交番の検問を受けた。当時は違反キップなどないから、きつちり調書をとられたが、不思議なことにそのまま遠征を続行することには見て見ぬふりをしてくれた。「のちに、それが黒江課長の個人的な連絡によつての措置だったことが判り、まさに感謝感激であった。」(藏満先輩、後日談)

熊本から鹿児島に抜ける途中に三太郎峠という難所がある。現在三ヶ所ともトンネルになっている。北から赤松太郎、佐敷太郎、津奈木太郎峠のことで事前の「五万分の一地図」での調査でもかなりきびしく、ここを抜けるとあとは楽だということになっていた。通過は夜の二時過ぎ、なるほど右へ左へ山道はうねっていて、峠近くからは遙か谷底からこちらへ向かつてのぼってくる車のライトビームが見える。Uカーブ、Vカーブの手前ではあらかじめ待機し、隘路でのすれ違いをさけて走行した。なにしろすぐ横は真つ暗な崖つぶちだ。

その難所も無事通過しもうすぐ出水^{いづみ}というあたりで事故が起きた。一号車が道路わきのたんぼに入つて横転している。一号車の荷台に乗つていた部員は眠りこんでいて、走行の揺れが止まったので目を開けるとなぜかベンチが天井からぶら下がつていたという。ショックが全くなかつたので車が九十度側転しているのが、すぐには理解できなかつたのだろう。藏満先輩の後日談では「運転を交替してしばらくして、トラックの荷台の後ろから、崖下の麦田の上に未明の光の元に、美しくたなびく朝霧に酔いながら小用を足していた私が突然車から放り出され、(柔道の受け身を知っていた私は反射的に)地面(約二メートル下の麦畑)に軟着陸してふと車を振り返るとエンジンがまだ廻つており、これは一大事と運転席右ドアに駆けのぼつて『エンジンを切れ』と声をかけ、上から右ドアを引き上げるまで運転席の三人はまだそのままの姿勢でじっとしていた。』そうだ。一番左側の下敷きになつていた部員は「重いぞ、つぶれそうだぞ、早くどいてくれ。」と思つていたという。



青島付近



島原鉄道沿いを走る一行

二号車が追いついたときはまだ右前車輪がカラカラ音を立てて回っていたから、ほんの前のことだったのだろう。
やがて藏満先輩らが熊本産交バスのターミナルに行き事故車引き上げを依頼し、産交の大型エンジンを搭載しているバスが現場に派遣され、道路に引き揚げられると一行はまた何事もなかったように遠征を続けた。(たんぼの持ち主を探しだし、藏満先輩がそれなりのお詫びの形をすませた。)

おからの味は密の味

この九州一周にまつわるその他のエピソードは各地の座談会語録にも出てくるが、とくにM氏が鹿児島島の銭湯に入ったときタオルとパンツを間違えて、浴槽の中で気がついたこととか、別府の野営地からすぐのところに豆腐屋があつて朝の四時半頃散歩中の部員がおからのおいしそうなおいをかぎつけ、その「おから」をむさぼり食つて空腹すきばらをみたしたという話もある。そのときの部員は四十二年後の座談会(99/2)で当時を思い出して「あれはうまかつたな」と頷きあつていた。

この九州一周の写真に少年がひとり写っている。官舎におられた吉武教授のお子さんで「吉武のボン」などと呼ばれていた。のちに、工大自動車部にはいった(39)吉武 氏である。

お便り

九州一周自動車旅行の思い出

(32) 丸山

一九五四年、自動車の耐久性実地試験と称して、九州一周の自動車旅行に参画した。トラック二台に部員十七名が分乗して、宿泊は、行く先々で、部員の各御実家のお世話になったが、まだまだ食べる物ない時代に、大変良くしていただ

いた思い出は、今も脳裏に焼き付いている。たしか学寮の裏のクラブで夜食に十円のウドンで空腹を満たしていた時代である。

ところが、順調なすべり出しをして間もなく、熊本の三太郎峠を越えた途端にトラブル発生、約一メートル下の田圃に横転した。朝方の四時十五分、雨の中、右に左に急カーブの七曲りの山道を切り抜けた安堵感と朝方の睡魔におそわれてのアクシデント。幸いにも大型の熊本産交バスの運転手の御親切で無事脱出することが出来た時の喜びは今も忘れられない。それにもまして、一人の怪我人も出なかったことが不幸中の幸いであった。

事故のあと、警察の指示に反して、旅の続行を決めた先輩の決断も大したものだが、お蔭で九州一周の自動車旅行という貴重な経験をさせてもらったことが、のちのち、いろんな面でプラスになったことを付け加えておきたい。



横転した車を引き揚げる熊本産交バス